

方言アクセントの誕生

著者	木部 暢子
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
号	2
ページ	23-35
発行年	2010-07
URL	http://doi.org/10.15084/00000557

方言アクセントの誕生

The Formation of Various Accent Systems in Japanese

木部 暢子 (KIBE Nobuko)

国立国語研究所 (NINJAL)

《要旨》日本語の方言アクセントはバリエーションが豊富である。なぜ、このような豊富なバリエーションが生まれたかについて、従来は大きく、2つの説があった。1つは、諸方言アクセントは、平安時代京都アクセントのような体系を祖としている。これが各地に伝播し、各地でそれぞれ変化したために、現在のようなバリエーションが生まれた、という説。もう1つは、日本語は、もともと、アクセントの区別のない言語だった。そこへ平安京都式のような複雑な体系をもつアクセントが京都に生まれ、その影響で、アクセントの区別がなかった地域にもアクセントの区別が生まれた、という説。しかし、いずれの説も、表面的な現象だけを捉えた説であって、アクセントの弁別特徴に対する考慮が欠けている。そこで、本稿では、アクセントの弁別特徴を考慮して、方言アクセントが如何にして誕生したかについて考察し、試論を提案した。

Abstract: Japanese dialects are full of variety in accent systems. Why did such rich variation develop? There are two opinions about it. One is that these variations developed because the Heian Period Kyoto accent spread outward long ago, and changed respectively in each place. Another is that Japanese was at first a language with no accent distinctions. However complex accent system appeared in Kyoto, and accent distinctions developed in each place under that influence. But both opinions focus on only superficial phenomena, and lack consideration of distinctive features. So in this paper, I investigate how various accent systems develop by considering the distinctive features of accent, and propose a tentative explanation.

1. 日本語のアクセントの多様性

方言の調査の際に、私は方言話者の方にいつもこう尋ねることにしている。「この地域の方言と隣の地域の方言はどこが違いますか？」するとたいていの場合、次のような答えが返ってくる。「隣の地域とは全然違う。特にアクセントが違う」近いものほど違いに敏感になるということのあらわれだと思うが、興味深いのは、その例としてアクセントが挙げられることが圧倒的に多いということである。これはある意味、当然のことかもしれない。というのは、すべての発話には必ずアクセントが付いていて、アクセントなしの発話などあり得ないから、それだけアクセントは人々の耳に染みついているということになる。そうすると、ちょっとでも違うアクセントが聞こえたときに、それに敏感に反応してしまうからである。

一方、アクセントは地域差が大きいのも事実である。しかも、市町村よりもっと小さな

単位でアクセントが異なるという現象が全国的に見られる。地元の人はそのような違いを経験的に知っていて、アクセントでその人の出身を言い当てたりする。

ただ、地元の人が「隣の地域はアクセントが違う」というときの「アクセント」は、研究上の「アクセント」よりも広い意味を含んでいるような気がする。『言語学大辞典』第6巻(1996)によると、英語のaccentはかなり広い意味をもち、「訛り」や「強調」、「文アクセント(sentence accent)」、「プロミネンス(prominence)」といった「イントネーション」に関することをさす場合がある。また、それ以外に、主として単語に関する韻律的特徴をさす場合があり、こうした場合には「語アクセント(word accent)」とよばれる。音声学的に、そして音韻論的にもっとも重要なのは語アクセントであり、日本語では、アクセントといえば語アクセントをさすのが普通である、という。地元の人というアクセントは、広い方の「アクセント」を指しているようである。イントネーションの地域差も重要なテーマではあるが、それについては機会を改めることにして、ここでは「語アクセント(word accent)」にしぼって、日本語アクセントの多様性について見ていきたいと思う。

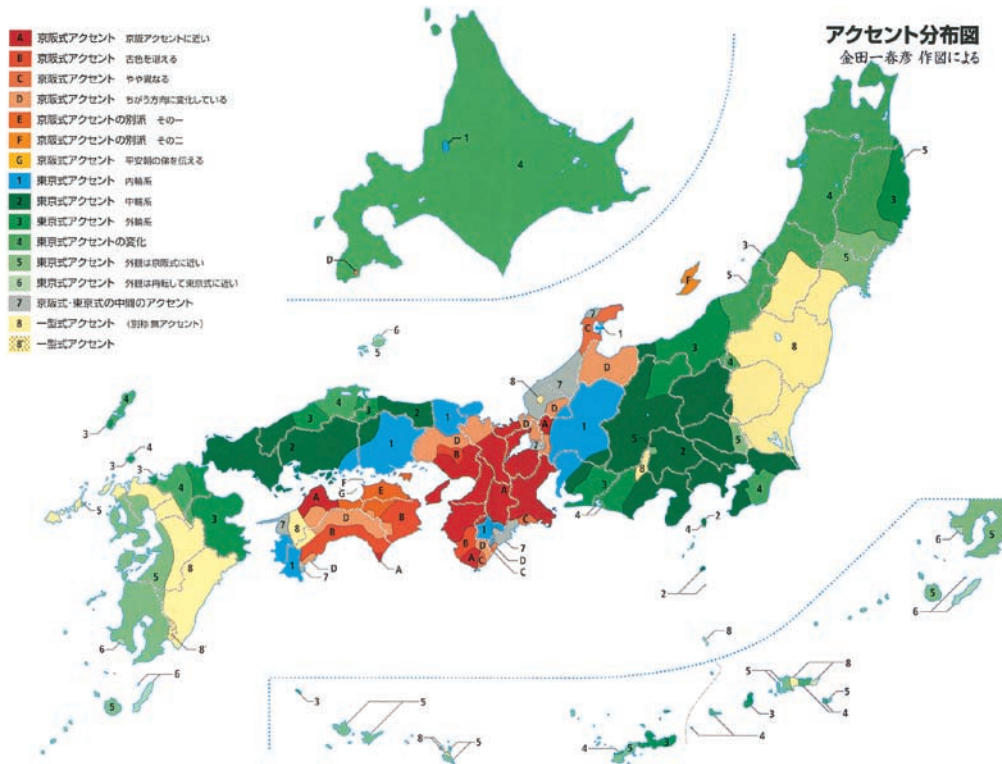
2. 方言アクセントの全国分布

最初に、アクセントの全国分布の状況を見てみよう。(1)は金田一春彦によるアクセント分布図、(2)は平山輝男によるアクセント分布図、(3)は早田輝洋によるアクセント分布図である。金田一の分布図は、かなり細かい分類になっているが、大きくは東京式アクセント、京阪式アクセント、一型式アクセントの3つに分類される。平山の分布図は、崩壊アクセント(金田一のいう一型式アクセント)とは別に、曖昧アクセントと統合一型のアクセントを立てている点に特徴がある。平山は、東京式が曖昧化して崩壊アクセントや一型アクセントが誕生したという立場に立っているため、これらのタイプを重視したものと思われる。また、九州西南部や奄美沖縄などのアクセントを東京式や京都式のカテゴリーに入れず、特殊アクセントとしている点も平山の特徴である(金田一では東京式に入れている)。このような違いはあるにしても、金田一の分布図と平山の分布図は、実際のアクセント現象を重視して作成されたという点で共通している。

それに対し、早田のアクセント分布図は、アクセント現象というよりも、アクセント現象を成り立たせている弁別特徴に重点を置いた分布図である。早田の挙げる弁別特徴とは、「位置のアクセント」と「声調(トーン)」の2種類で、「位置のアクセント」というのは、「どのx(xは言語によって、音節、モーラ、その境界など)にアクセントがあるか」という「位置」が有意味なアクセント、「声調(トーン)」というのは、「各語(文節)ほどの声調(トーン)をもつか」という全体的なパターンが有意味なアクセントのことである。従来の用語でいうなら、「位置のアクセント」は核によって型が区別されるようなアクセント(たとえば、東京方言の「端」は核がない、「箸」は第1拍目に核があるなど)、「声調(トーン)」はある一定の範囲を覆う音調(たとえば、京都方言の「端」は高起式、「箸」は低起式など)ということになる。

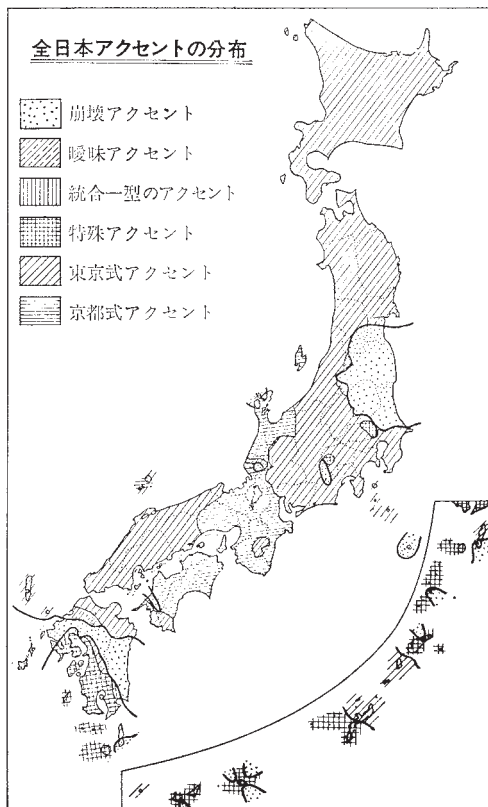
この2つの特徴の組み合わせにより、以下の4つのタイプが抽出される(「位置のアクセ

(1) 金田一のアクセント分布 (金田一監修2001)



(2) 平山のアクセント分布 (平山1968)

(3) 早田のアクセント分布(1) (早田1977)



セント], 「声調 (トーン)」 という用語は長いので, 以下ではこれを「核」, 「トーン」と呼ぶことにする)。

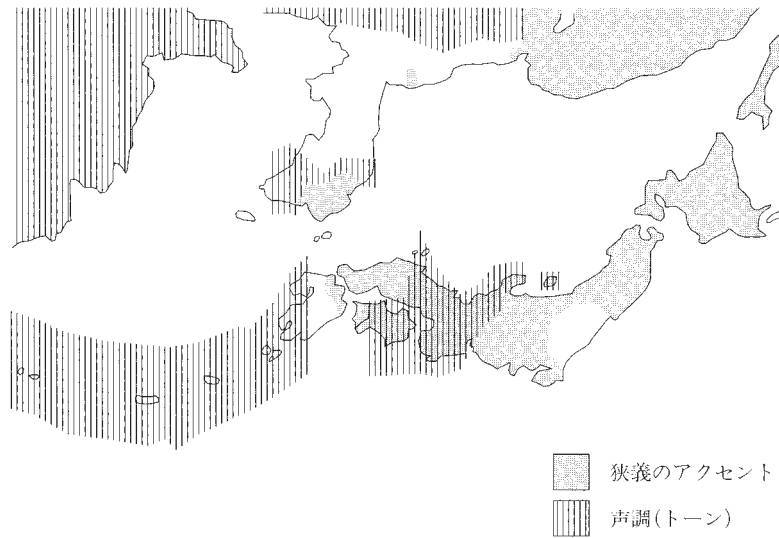
$\left\{ \begin{array}{l} \text{トーンをもつ} \\ \text{トーンをもたない} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{核をもつ} \\ \text{核をもたない} \end{array} \right.$	①京阪式アクセント
		②語声調 (トーン)
$\left\{ \begin{array}{l} \text{核をもつ} \\ \text{核をもたない} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{核をもつ} \\ \text{核をもたない} \end{array} \right.$	③東京式アクセント
		④無アクセント

①はトーンと核の両方をもつタイプ, ②はトーンをもつが核をもたないタイプ, ③は核をもつがトーンをもたないタイプ, ④はトーンも核ももたないタイプである。これを金田一や平山の分類と比較すると, ①は京阪式アクセント・京都式アクセントに, ③は東京式アクセントに, ④は一型式アクセント・崩壊アクセントにほぼ対応する。④については, 金田一, 早田ともに「一型式」とよんでいるが, ここでは「無アクセント」とよぶことにする。その理由は, 従来, 「一型式アクセント」という名称の中に, いろいろなアクセントが含まれてきたからである。たとえば, 一定のパターンをもたない福島方言や熊本方言のようなもの (平山の崩壊アクセント) も, また, すべての語 (文節) が尾高という一定のパターンに実現する宮崎県都城方言のようなもの (平山の統合一型) も, どちらも「一型式アクセント」とされることが多かった。しかし, 全国の方言を核かトーンかに分ける立場に立つならば, 都城方言のようなものは, 1種類のトーンをもつ語声調方言, つまり②に分類する方がよいと思われる。従来の「一型式アクセント」との混乱を避けるために, ここでは「無アクセント」とよぶ。最後に, ②は金田一, 平山のどちらにも対応するカテゴリーが存在しない。強いていえば, 平山の特殊アクセントに近いかもしれないが, 平山の分布図を見ると, 関東や中部にも特殊アクセントの記号が描かれていて, 必ずしもトーンの要素に注目したものを特殊アクセントとよんでいるわけではなさそうである (語声調の考えに近いのは, 上野1984のN型アクセントである)。

このように, 核とトーンの2種類の特徴により日本語アクセントを類型化する点に早田の分布図の特徴があるわけだが, 中でも「位置のアクセント」が日本列島の東部に分布し, 「トーン」が日本列島の西部に分布し, 中央部 (近畿四国) で2つの要素が併存するという分布の描き方は, それまでの研究にない新しい視点の導入で, 大変, 示唆的である。じつは, 早田は韓国語や中国語との連続性も視野に入れているのだが ((4) 参照), これは非常に大きな問題となるので, ここではこれ以上触れない。

本稿では, 早田の考えに賛同し, これに基づいて方言アクセントの誕生プロセスを考えてみたいと思う。

(4) 早田のアクセント分布(2) (早田1999)



3. 諸方言アクセントの具体例

まず、4つのタイプの内容を具体的に見ていくことにしよう。4タイプの中では③の東京式アクセントがもっともよく知られているので、最初に東京式アクセントを取り上げる。

(5) 東京方言のアクセントの具体例

〈1拍名詞〉	〈2拍名詞〉	〈3拍名詞〉	〈4拍名詞〉
ハ (葉)	ハナ (鼻)	サクラ (桜)	トモダチ (友達)
ハ' (歯)	ハナ' (花)	オトコ' (男)	イモート' (妹)
	アメ (雨)	ココロ (心)	ミズウミ (湖)
		カブト (兜)	イロガミ (色紙)
			カマキリ (蟷螂)

※ 上線は高く発音することを、'は次の語が低く続くことをあらわす。

すでに多くの研究によって明らかにされているように、東京方言のアクセントは、〈下げ核があるかないか、あるとすればどの拍にあるか〉によって型の種類が区別される体系をもつ。無核の型を含めて、1拍語には2つの型、2拍語には3つの型、3拍語には4つの型、4拍語には5つの型、n拍語にはn+1の型が存在することになる。これを整理したのが(6)である。

(6) 東京方言のアクセント体系

〈1拍〉	〈2拍〉	〈3拍〉	〈4拍〉
○	○○	○○○	○○○○
○ ¹	○○ ¹	○○○ ¹	○○○○ ¹
	○ ¹ ○	○○ ¹ ○	○○○ ¹ ○
		○ ¹ ○○	○○ ¹ ○○
			○ ¹ ○○○

次に、②のタイプの鹿児島方言のアクセントを見てみよう。

(7) 鹿児島方言のアクセントの具体例

	〈1音節名詞〉	〈2音節名詞〉	〈3音節名詞〉	〈4音節名詞〉
A型	ハ (葉)	ハナ (鼻)	サクラ (桜)	アカトンボ (赤とんぼ)
B型	ハ (歯)	ハナ (花)	ココロ (心)	イナビカイ (稲光)

※ 韻律の単位はシラブル。ゝは音節内の下降をあらわす。

鹿児島方言は、A型（最後から2音節目が高く、最後が下降する型）とB型（最後の1音節が高い型）の2種類のトーンを持っている。単語がどんなに長くなっても、型の種類はこの2つしかない。また、後ろに助詞や助動詞などの付属語が続くと、語のトーンが助詞・助動詞の最後まで延長される。

(8) 助詞接続形のアクセント

A型	ハナ (鼻)	ハナガ (鼻が)	ハナカラ (鼻から)	ハナカラガ (鼻からが)
B型	ハナ (花)	ハナガ (花が)	ハナカラ (花から)	ハナカラガ (花からが)

以上から鹿児島方言のアクセント体系を整理すると、次のようになる。

(9) 鹿児島方言のアクセント体系

	〈1音節〉	〈2音節〉	〈3音節〉	〈4音節〉
A型	〇	〇〇	〇〇〇	〇〇〇〇
B型	〇	〇〇	〇〇〇	〇〇〇〇

次に、①のタイプの京都方言を見てみよう。

(10) 京都方言のアクセントの具体例

〈1拍名詞〉	〈2拍名詞〉	〈3拍名詞〉	〈4拍名詞〉
ハー (葉)	ハナ (鼻)	サクラ (桜)	トモダチ (友達)
ヒー (日)	(〇〇)	(〇〇〇)	(〇〇〇〇)
	ハナ (花)	フタリ (二人)	カミナリ (雷)
		オトコ (男)	ミズウミ (湖)
			ネーサン (姉さん)
ハー (歯)	ソラ (空)	ウサギ (兎)	ニンジン (人参)
	アメ (雨)	マッテ	(〇〇〇〇)
		カブト (兜)	イロガミ (色紙)
			ムラサキ (紫)

※ 1拍名詞は長めに発音される。

※ (〇〇), (〇〇〇) などは、該当する単語がないことをあらわす。

京都方言のアクセントは、高く始まるタイプ（高起式）と低く始まるタイプ（低起式）の2種類のトーン、及び下げ核によって型が区別されるような体系をもつ。高起式でも低起式でも、最後の拍に下げ核をもつ語がきわめて少ないため、この部分が空きになっているが、理論的には、 n 拍語には $2n+1$ 個の型が存在する(11)。

(11) 京都方言のアクセント体系

〈1拍〉	〈2拍〉	〈3拍〉	〈4拍〉
H○	H○○	H○○○	H○○○○
H○ [∇]	(H○○ [∇])	(H○○○ [∇])	(H○○○○ [∇])
	H○ [∇] ○	H○○ [∇]	H○○○ [∇] ○
		H○ [∇] ○○	H○○ [∇] ○○
			H○ [∇] ○○○
L○	L○○	L○○○	L○○○○
	L○○ [∇]	L○○○ [∇]	(L○○○○ [∇])
		L○○ [∇] ○	L○○○ [∇] ○
			L○○ [∇] ○○

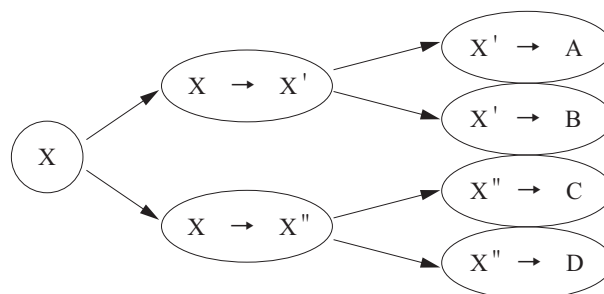
※ Hは高起式を、Lは低起式を表す。

最後に④のタイプの無アクセントだが、これはトーンも核ももたないので、同じ単語でもいろいろな型で発音される。例示は省略する。

4. 方言アクセントの誕生に関する従来の考え方

日本語のアクセントがなぜこのように多様なのかについては、従来、次のように説明されてきた。まず、各地の方言アクセントは名義抄式（文献から復元される平安時代の京都のアクセント）を祖とし、これが近畿から近隣の地域へ伝播していった。そのうちのある地域では、それに変化が起こり、変異形が生まれた。すると、次にはその変異形が隣接の他の地域へ伝播していき、そこでまた変化が起こり、さらなる変異形が生まれ、さらにこれが隣接する他の地域へ伝わっていった。このような過程が繰り返された結果、多様なバリエーションが生まれた(12)。

(12) 多様性の誕生のイメージ



一方で、接触により各地でアクセント型の獲得とアクセント変化が起こり、その結果、

多様性が生まれたという考え方もある（山口1998）。いずれにしても、従来の方言アクセントの多様性の誕生に関する研究は、個々のアクセント型の変化の現象（ $\overline{\text{○○}}$ 型から ○○ 型へ変化したなど）を捉えたものが多く、アクセント体系がどう変化したのかという観点からの研究はほとんどない。しかし、アクセントに限らず、言語の変化において最も重要なのは、個々の変化の現象の背景にある体系の変化である。それを考えるために、もう少し、従来の説を見てみよう。

(13) は、金田一（1954）の説により、現代京都アクセントと現代東京アクセントの形成過程を図式化したものである。

(13) 金田一による京都式アクセント、東京式アクセントの形成過程

	〈名義抄式〉	〈補忘記式〉	〈京都式〉	〈x式〉	〈東京式〉
1類 (庭・鳥)	$\bullet\bullet\overline{\text{ガ}}$	= $\bullet\bullet\overline{\text{ガ}}$	= $\bullet\bullet\overline{\text{ガ}}$	= $\bullet\bullet\overline{\text{ガ}}$	> $\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$ = $\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$
2類 (石・川)	$\bullet\text{○}\overline{\text{ガ}}$	} $\bullet\text{○}\overline{\text{ガ}}$	= $\bullet\text{○}\overline{\text{ガ}}$	= $\bullet\text{○}\overline{\text{ガ}}$	> $\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$ = $\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$
3類 (山・犬)	$\text{○○}\overline{\text{ガ}}$		= $\text{○○}\overline{\text{ガ}}$	= $\text{○○}\overline{\text{ガ}}$	> $\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$ = $\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$
4類 (松・笠)	$\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$	= $\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$	> $\text{○○}\overline{\text{ガ}}$	= $\text{○○}\overline{\text{ガ}}$	> $\bullet\text{○}\overline{\text{ガ}}$ } $\bullet\text{○}\overline{\text{ガ}}$
5類 (春・雨)	$\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$	> $\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$	= $\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$	> $\text{○○}\overline{\text{ガ}}$	> $\text{○○}\overline{\text{ガ}}$ }

※ \bullet , $\overline{\text{ガ}}$ は高く発音することを, ○ , ガ は低く発音することを, \bullet は拍内下降をあらわす。
 ※ 名義抄(みょうぎしょう)は平安末の漢和辞書, 補忘記(ぶもうき)は貞享4年(1687)刊の真言宗の資料。いずれもアクセント記号が付されている。

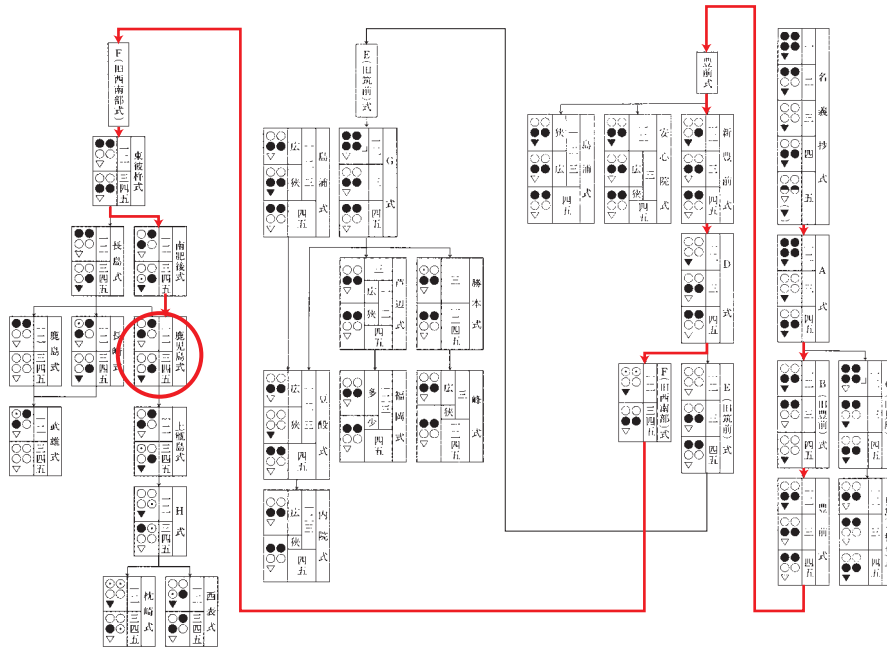
現代京都式アクセントは、鎌倉時代頃、3類語に $\text{○○}\overline{\text{ガ}} > \bullet\text{○}\overline{\text{ガ}}$ の変化が起き、江戸時代に4類語に $\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}} > \text{○○}\overline{\text{ガ}}$ の変化が起きて成立した、また、現代東京式アクセントは、京都式に $\bullet\bullet\overline{\text{ガ}} > \text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$ (1類語), $\bullet\text{○}\overline{\text{ガ}} > \text{○}\bullet\overline{\text{ガ}}$ (2・3類語), $\text{○}\bullet\overline{\text{ガ}} > \bullet\text{○}\overline{\text{ガ}} > \text{○○}\overline{\text{ガ}}$ (5類語), $\text{○○}\overline{\text{ガ}} > \bullet\text{○}\overline{\text{ガ}}$ (4・5類語) の変化が起きて成立したとされる。ただし、変化は近畿よりも早く、鎌倉初期以前には関東は〈x式〉の段階にあったのではないかという。これらの変化は、「語頭低下の変化」、「アクセントの山の後退の変化」のように、どこでも起こりやすい変化であるため、各地で同じ変化がこの順に進んだというのである。

しかし、アクセント変化は、アクセント体系との関係で起こりやすさの度合いが違っているはずである。たとえば、3類語に起きた $\text{○○}\overline{\text{ガ}} > \bullet\text{○}\overline{\text{ガ}}$ の変化は、低起式から高起式への変化、つまり、トーンの変化を伴っている点で、トーンの特徴をもつ方言にとっては大きな変化である。京都語は鎌倉～室町時代にこの変化を経験した（これについては後述する）。また、現代東京式が誕生するときに起きた変化は、いずれも「高起式>低起式」、または「低起式>高起式」といったトーンの交替を伴っている。したがって、トーン対立を有する方言では、このような変化はそう簡単には起きない。関東では「高起式：低起式」のトーン対立が早く失われた（あるいは、そもそもトーン対立を受け入れなかった）ために、この変化が進んだのだと思われる。

もう1つ、鹿児島アクセントの例を挙げておこう。従来、鹿児島アクセントは、(14)のような過程を経て誕生したといわれてきた。これによると、現代鹿児島アクセントは、名義抄式(トーンと核のタイプ)から9回のアクセント変化を経て誕生したことになる。

いる。また、変化の途中で、核のタイプの豊前式アクセントを經由している。トーンと核のタイプ（名義抄式）からいったん核のタイプ（豊前式）へ変化し、さらにトーンのタイプ（鹿児島式）へ変化した、ということになるのだろうか。このような体系の度重なる変化が起きないとはいえないが、そのプロセスに関する説明がない限り、(14)の系譜には従いがたい。

(14) 九州方言アクセントの系譜（奥村1990）（赤線は筆者）



5. 方言アクセントの誕生に関する試案

以上のような点に留意して、アクセント体系の面から方言アクセントの誕生のプロセスをもういちど見直してみよう。まず、現代京都方言は、先に述べたように、3類語が「低起式>高起式」の変化を起こしているが、この変化は3類語に限らず、低起式で低の拍が2つ以上続く型のすべてに起きている。おそらく、これらの型は、もとは低低……の最後の低の拍に次を上げるという特徴（上げ核）をもっていて、この特徴のために、ちょうど踏み台を踏むような形で、低低……の最後の低の拍が低くくぼみ、その反動でその前が押し上げられて、「低起式>高起式」の変化が起きたのではないと思われる（川上1965にこの指摘がある）。

(15) 鎌倉～室町時代京都語における「低起式→高起式」の変化

○○↑	>	*○○↑	>	*●◎	>	●○
○○↑●	>	*○○↑●	>	*●◎●	>	●○○
○○↑●●	>	*○○↑●●	>	*●◎●●	>	●○○○
○○○↑	>	*○○◎↑	>	*●●◎	>	●●○
○○○↑●	>	*○○◎↑●	>	*●●◎●	>	●●○
○○○○↑	>	*○○◎◎↑	>	*●●●◎	>	●●●○

※ ↑は次を上げることをあらわす。また、○は低い音節を、
●は高い音節を、◎は低くくぼんだ音節をあらわす。

京都方言に起きたもう1つの変化、4類語の $\overline{\text{○●ガ}} > \overline{\text{○○ガ}}$ については、現象だけ見れば、上昇の位置が後ろへずれたように見えるが、現代京都アクセントでは、4類語が低起式無核の系列（(11)のL○, L○○, L○○○, L○○○○）に属している。この系列では「ガ」などの助詞が接続すると助詞が高く発音されるが、これは低起式のトーンの特徴と考えられている。だとすると、この変化は上昇の位置が後ろへずれたというよりも、上げ核の消失と考える方がよい。以上をまとめたのが(16)である。

(16) 現代京都アクセントの誕生過程

	〈名義抄式〉	〈補忘記式〉	〈現代京都方言〉
2拍名詞 1類 (庭・鳥)	H○○	= H○○	= H○○
2類 (石・川)	H○ [∟] ○	} H○ [∟] ○	= H○ [∟] ○
3類 (山・犬)	L○○ [∟]		
4類 (松・笠)	L○ [∟] ○		
5類 (春・雨)	L○ [∟] ○ [∟]	= L○ [∟] ○ [∟] > L○○ [∟]	
3拍名詞 1類 (形・車)	H○○○	= H○○○	= H○○○
2類 (小豆)	H○○ [∟] ○	} H○○ [∟] ○	} H○ [∟] ○○
4類 (頭・男)	L○○○ [∟]		
5類 (命・心)	L○○ [∟] ○ > H○ [∟] ○○		
6類 (兎・狐)	L○ [∟] ○○	= L○ [∟] ○○ > L○○○	
7類 (兜・苺)	L○ [∟] ○ [∟] ○	= L○ [∟] ○ [∟] ○ > L○○ [∟] ○	

※ ∟ は下げ核を,] は上げ核をあらわす。

次に、語声調の鹿児島方言だが、現代鹿児島アクセントは、名義抄式アクセントとの間に、「A型：高起式」、「B型：低起式」というきれいなトーンの対応をもっている。このことから、鹿児島アクセントは、名義抄式の高起式、低起式の特徴をそのまま引き継いだものと思われる（3類語が高起式に変化している補忘記式とは対応しない。したがって、鹿児島アクセントは、補忘記式に変化する以前の、平安末の京都アクセントの流れを汲んでいることになる）。一方、核の方は、名義抄式の核をまったく受け継いでいない。これらのことから、現代鹿児島アクセントは、(17)に示すような、きわめてシンプルな変化過程によって誕生したのではないと思われる。

(17) 鹿児島アクセントの誕生過程

	〈名義抄式〉		〈前鹿児島〉	〈現代鹿児島方言〉
2拍名詞	1類 (庭・鳥) H○○	}	H○○	> A型 (○○̄)
	2類 (石・川) H○ ¹ ○			
	3類 (山・犬) L○○	}	L○○	> B型 (○○̄)
	4類 (松・笠) L○ ¹ ○			
	5類 (春・雨) L○ ¹ ○ ¹			
3拍名詞	1類 (形・車) H○○○	}	H○○○	> A型 (○○○○̄)
	2類 (小豆) H○○ ¹ ○			
	4類 (頭・男) L○○○	}	L○○○	> B型 (○○○○̄)
	5類 (命・心) L○○ ¹ ○			
	6類 (兎・狐) L○ ¹ ○○			
	7類 (兜・苺) L○ ¹ ○ ¹ ○			

現代東京方言のアクセントは、トーンの特徴をもっていないので、どこかの段階でトーンの特徴を捨てて、現代の形に至ったと考えられる。下がり目の位置についても、東京アクセントは、補忘記式や現代京都方言とはかなり違っている。おそらく、補忘記式のようなアクセントから「高起式：低起式」のトーンの特徴を捨象し、下がり目の位置を後ろにずらしていったものが、現代東京アクセントではないかと思われる (18)。

(18) 現代東京アクセントの誕生過程

		〈補忘記式〉		〈前東京式〉		〈現代東京方言〉
2拍名詞	1類 (庭・鳥)	H○○	=	H○○	>	○○
	2・3類 (石・山)	H○ ¹ ○	>	H○○ ¹	>	○○ ¹
	4類 (松・笠)	L○ ¹ ○	}	L○○ ¹	>	○ ¹ ○
	5類 (春・雨)	L○ ¹ ○ ¹				
	3拍名詞	1類 (形・車)	H○○○	=	H○○○	>
2・4類 (小豆・男)		H○○ ¹ ○	>	H○○○ ¹	>	○○○ ¹
5類 (命・心)		H○ ¹ ○○	>	H○○ ¹ ○	>	○○ ¹ ○
6類 (兎・狐)		L○ ¹ ○○	>	L○○ ¹ ○	>	○○○
7類 (兜・苺)		L○ ¹ ○ ¹ ○	>	L○○ ¹ ○ ¹	>	○ ¹ ○○

最後に、無アクセントは、トーンと核の両方が消失したものである。東北や北関東の無アクセントは、おそらく、東京式から核の特徴が消失して生まれたものと思われる。また、九州の無アクセントは、鹿児島式からトーンの特徴が消失して生まれたものと、北部九州式から核の特徴が消失して生まれたものの両方があったのではないかと思う。

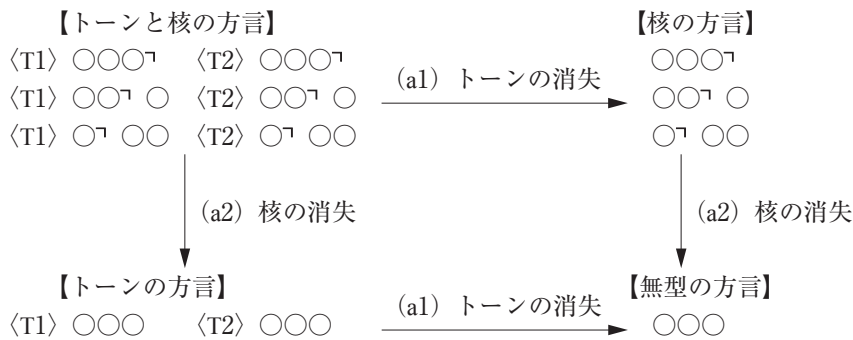
6. アクセント変化について

最後に、アクセント変化についてまとめておこう。

(19) アクセント特徴の変化

- (a) アクセント特徴の消失 { (a1) トーンの消失
(a2) 核の消失
- (b) アクセント特徴の質の変化 { (b1) トーンの質の変化
(b2) 核の質の変化
- (c) アクセント特徴の獲得

(20) 特徴の消失によるアクセント体系の変化



※ T1, T2はトーンの種類をあらわす。

まず、変化には、大きく分けて、(a) アクセント特徴の消失、(b) アクセント特徴の質の変化がある。(a) アクセント特徴の消失には、(a1) トーンの消失と (a2) 核の消失の2種類があり、(b) アクセント特徴の質の変化には、(b1) トーンの質の変化と (b2) 核の質の変化の2種類がある。上の例でいうと、(a1) には東京方言に起きたトーンの消失が、(a2) には鹿児島方言に起きた核の消失が、(b1) には鹿児島方言に起きた「高起式>A型」、 「低起式>B型」の変化が、(b2) には東京方言アクセントに起きた核が後ろへずれる変化などが挙げられる。(15) に挙げた、○○>●○, ○○○>●●○, ○○●>●○○などの変化には、(b1) トーンの変化と (b2) 核の変化の両方の変化がかかっている。

この他に、(c) アクセント特徴の獲得（言語接触による獲得を含む）という変化が考えられるが、今回は取り上げなかった。

参考文献

- 早田輝洋 (1977) 「日本語の音韻とリズム」『伝統と現代』45: 41-49.
- 早田輝洋 (1987) 「アクセント分布に見る日本語の古層」『月刊言語』16(7) (別冊「総合特集—日本語の古層」) (早田1999に再録, 187-196).
- 早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』東京: 大修館書店.
- 平山輝男 (1936) 「南九州アクセントの研究 (一)」『方言』6(4): 26-47.
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』東京: 学界之指針社.
- 平山輝男 (1968) 『日本の方言』(講談社現代新書160) 東京: 講談社.
- 川上 葵 (1965) 「いわゆる低低低型から高高低型への変化」『音声学会会報』118 (川上1995に再録, 434-441).
- 川上 葵 (1995) 『日本語アクセント論集』東京: 汲古書院.

- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』東京：勉誠出版。
木部暢子 (2002a) 「比較方言学」日本方言研究会 (編) 『21世紀の方言学』101-113. 東京：国書刊行会。
木部暢子 (2002b) 「方言のアクセント」江端義夫 (編) 『朝倉日本語講座10 方言』50-67. 東京：朝倉書店。
金田一春彦 (1937) 「現代諸方言の比較から見た平安朝アクセント」『方言』7(6): 1-43。
金田一春彦 (1954) 「東西両アクセントの違いができるまで」『文学』22(8) (金田一1975に再録, 49-81)。
金田一春彦 (1960) 「国語のアクセントの時代的変遷」『国語と国文学』37(10): 28-46。
金田一春彦 (1962) 「方言と方言学」国語学会 (編) 『方言学概説』東京：武蔵野書院 (金田一1977aに再録, 3-24)。
金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』東京：塙書房。
金田一春彦 (1975) 『日本の方言』東京：教育出版。
金田一春彦 (1977a) 『日本語方言の研究』東京：東京堂出版。
金田一春彦 (1977b) 「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語11 方言』129-180. 東京：岩波書店。
金田一春彦 (監修)・秋永一枝 (編) (2001) 『新明解日本語アクセント辞典』東京：三省堂。
中井幸比古 (1996) 「京都アクセントにおける式保存について」平山輝男博士米寿記念会 (編) 『日本語研究諸領域の視点』下巻: 1015-1055. 東京：明治書院。
中井幸比古 (2003) 「アクセントの変遷」上野善道 (編) 『朝倉日本語講座3 音声・音韻』85-108. 東京：朝倉書店。
奥村三雄 (1975) 「方言区画」『シンポジウム日本語5 日本語の方言』213-290. 東京：学生社。
奥村三雄 (1990) 『方言国語史研究』東京：東京堂出版。
坂本清恵 (2000) 『中近世声調史の研究』東京：笠間書院。
添田建治郎 (1996) 『日本語アクセント史の諸問題』東京：武蔵野書院。
徳川宗賢 (1962) 「“日本諸方言アクセントの系譜”試論—「類の統合」と「地理的分布」から見る—」『学習院大学国語国文学会誌』6 (徳川1993に再録, 483-511)。
徳川宗賢 (1974) 「方言地理学と比較方言学」『学習院大学国語国文学会誌』17 (徳川1993に再録, 57-83)。
徳川宗賢 (1975) 「方言の地理的分布—特に分布の内容について—」大石初太郎・上村幸雄 (編) 『方言と標準語—日本語方言学概説—』東京：筑摩書房 (徳川1993に再録, 35-56)。
徳川宗賢 (1993) 『方言地理学の展開』春日部：ひつじ書房。
上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」『岩波講座日本語5 音韻』281-321. 東京：岩波書店。
上野善道 (1984) 「N型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古希記念会 (編) 『現代方言学の課題』第2巻, 167-209. 東京：明治書院。
山口幸洋 (1998) 『日本語方言一型アクセントの研究』東京：ひつじ書房。
山口幸洋 (2003) 『日本語東京アクセントの成立』鎌倉：港の人。
屋名池誠 (2004) 「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8(2): 46-57。

木部 暢子 (きべ・のぶこ)

国立国語研究所副所長, 時空間変異研究系長。1998年 博士 (文学) (九州大学)。
純真女子短期大学講師, 福岡女学院短期大学講師, 鹿児島大学法文学部教授を経て, 2010年4月から現職。

主要著書・論文:

- 『鹿児島県のことば』(共著, 1997年)
「18世紀薩摩の漂流民ゴンザのアクセントについて—助詞のアクセントとゴンザアクセントの位置づけ—」『国語学』第191集 (1997年)
『西南部九州二型アクセントの研究』(2000年)
「比較方言学」『21世紀の方言学』(2002年)
「方言のアクセント」『朝倉日本語講座10 方言』(2002年)
「方言のしくみ アクセント・イントネーション」『ガイドブック方言研究』(2003年)
『方言の形成』(共著, 2008年)
「イントネーションの地域差—質問文のイントネーション—」『方言の発見 知られざる地域差を知る』(2010年)

社会活動: 日本語学会評議員, 日本音声学会評議員, 日本方言研究会世話人, 日本学会議連携会員。